

ブルーメンベルクにおける「非概念性の理論」と「隠喩学」

下田和宣(京都大学大学院 OD)

本発表は 20 世紀ドイツの思想家ハンス・ブルーメンベルク(1920-1996)の後期テキストを対象とし、その哲学的意義を明らかにしようと試みるものである。「隠喩学」と呼ばれる彼の諸々の歴史記述についてはすでに広く紹介されている。さしあたりのところ、ブルーメンベルクはさしあたり思想家として認知されていることだろう。しかし 1957 年の論文「真理の隠喩としての光」においてはじめて提唱され、1960 年『隠喩学のためのパラダイム』で打ち立てられた彼独自の「隠喩学」は、当時流行していた「概念史研究」への批判的視座のもとで、実証的な歴史記述にとどまらない哲学的な射程を有していた。『隠喩学のためのパラダイム』「序論」において提示されているとおり、概念に還元されることのない特定の隠喩の絶対的・自立的な性格(いわゆる「絶対的隠喩」)に着目しつつ、その歴史的変遷がそのつどの概念的・哲学体系的思考の結晶化にとって「触媒的領域」として機能すること、またその分析から隠喩を「哲学的言語の根本要素」と理解することこそ、「隠喩学」の本来的な狙いなのである。このように、諸々の隠喩から「思考の下部構造」を読み取ろうとするブルーメンベルクの隠喩学的歴史記述の哲学的意義を正確に把握するためには、その記述を導いているオリエンテーションをはっきり理解する必要がある。

ところが後年になるにつれ、「隠喩学」はブルーメンベルク思想を代表する唯一の称号であるとは見なされなくなる。すなわち 70 年代後半から 80 年代にかけて、ブルーメンベルクは自身の仕事全体を「非概念性の理論」という枠組みのもとで再定式化しようとするのである。1979 年に出版された『難破船』の最終章「非概念性の理論に対する展望」、あるいは 2007 年に公刊された 1975 年ミュンスター大学での講義録などには、概念/隠喩に限定された隠喩学の修辞学的方法論を超えて、さらに隠喩の哲学的使用を可能なものとする「生活世界」の理論へと考察が拡張されるべきであるという態度が明確に打ち出されている。問題はこのいわば「転回」において何がどのように変化し、新たに成立してくるのか、という点にある。「非概念性の理論」を提起してもなお、ブルーメンベルクは隠喩学的歴史記述という自身の思考スタイルを変化させることはなかった。そのことは、「非概念性の理論の展望」が『難破船』という「航海」の隠喩史を扱う著作に付属していることをはじめ、『世界の読解可能性』(1981 年)や『洞窟の出口』(1989)などといった隠喩学的著作をこの時期以後においてもブルーメンベルクが精力的に発表していることからすでに明らかである。とするなら、ブルーメンベルク哲学の本来的な射程とそのあり方を明確化するためには、「非概念性の理論」という理論的定式化が持つ、隠喩学的実践への関わりについていまや問う必要がある。

この問題について遺稿調査を中心とする近年の研究では、70 年代におけるブルーメンベルクの現象学および哲学的人間学への取り組みからこの動きを整理することがなされてきている。とくに 2006 年に公刊された遺稿集『人間の記述』において詳細に知られるようになったブルーメンベルクの「現象学的人間学」は、現象学の人間学化という元来ではタブー視されてきた領域にあえて展開することにより、現実からの「迂回」あるいは「距離化」という概念を中心とした独自の哲学的人間学を形成するも

のとなっている。すでに公刊著作においても 80 年代の『世界時間と生活時間』(1986 年)からは現象学への接近が認められていたが、遺稿(とりわけ 2018 年に公刊された『現象学論集』)へのアクセスによって 80 年代におけるブルーメンベルクの取り組みはさらに肉付けされたかたちで理解可能なものとなっている。加えて、未公開の彼の教授資格申請論文「存在論的距離——フッサール現象学の『危機』」についての研究をはじめとした初期文書の研究(とりわけ 2017 年に出版されたクルト・フラッシュの研究が重要である)は、ブルーメンベルクが自身の思想形成の出発点より、フッサールを始めとした現象学の方法に関心を寄せ続けていたことを明らかにしている。ブルーメンベルクの思想は、いまや現象学的哲学という観点から読み直されつつあるのである。

しかしながら、現在明らかにされつつある彼の「現象学的人間学」と、従来の隠喩学的歴史記述との関係がいかなるものであるか、という問題は依然として残されている。それどころか、現象学・人間学からのアプローチはしばしば隠喩学を従属的・応用的に位置づけようとする。それによってブルーメンベルクの歴史探求の意義を副次化し、歴史の中で思索しようとしたブルーメンベルクの努力を理解し難いものにしてしまうのである。マルクス・ガブリエルがジジエクとの共著『神話・狂気・哄笑』の中で、その実在論的関心から展開したブルーメンベルク神話論に対する批判は、まさにその典型例であろう。理論と歴史記述とを切り離すこうした研究傾向が見ようとならないのは、狭義のブルーメンベルク研究の枠を超えて、歴史的媒介において遂行される哲学的思考の可能性なのである。

本発表が問題化し、乗り越えようと試みるのは従来の研究に支配的であったこうした見えざる前提である。ブルーメンベルク独自の思索圏はその前提を越えたところで——すなわち「非概念性の理論」と「隠喩学」を密に結びつけることで——開かれるだろう。以上の問題設定から、本発表ではまず「非概念性の理論」とはどのような学問的プロジェクトであるかを明確化しながら、その枠組みにおいて隠喩が与えられる位置について考察する。後期における諸々の資料を検討する中で最も注目すべきなのは、「背景」と「受容」という、前期隠喩学から「非概念性の理論」以後に至るまで通底する諸概念である。すでにかつて『隠喩学のためのパラダイム』においてブルーメンベルクは絶対的隠喩が思考の対象となるのではなく、むしろその思考の「背景」としてそれを方向づけるという機能に着目していた(背景隠喩法)。後年ではそれが現象学的考究のもと、「地平」の問題と結びつけられる。

それと並び、「受容」の概念もまた後期においてとりわけ前面化するもののひとつである。研究グループ「詩学と解釈学」における、ヤウスやイーザーといったいわゆる「受容美学」を代表する文学研究者たちとのやり取りを経て、ブルーメンベルクは独自に「受容」の概念を追求する。通常であれば「起源」に対して二次的・副次的に見なされざるをえない媒介的現象にもかかわらず、ブルーメンベルクはその事態を中心化する。ヘーゲル的な精神哲学に対する強烈なアンチテーゼであるとともに、ジンメル、ベンヤミン、カッシーラーといったいわゆるドイツ文化哲学の伝統と響きあうものがある。こうした系譜を考察に引き入れながら、本発表では最終的に、「迂回」のプロセスを本質化する隠喩学的記述を、ブルーメンベルク独自の文化哲学として性格づけてみたい。